

# キリスト教におけるインクルージョン研究Ⅱ

## －ルカ神学における「異邦人理解」－

すず き ふみ はる  
鈴 木 文 治

### 〈要 旨〉

本論は、ルカ神学におけるインクルージョン研究として、「異邦人」の理解を取り上げたものである。ルカは『ルカによる福音書』及び『使徒言行録』の著者として知られるが、当時の社会で差別や排除の対象となっている「異邦人」を、ルカ神学ではどのように取り上げ、位置づけているのかを探り、キリスト教におけるインクルージョンの思想や実践を考察するものである。

なお、本論は昨年の大学紀要第10号「キリスト教におけるインクルージョン研究-ルカ神学における障害理解-」の続編に当たるものである。

さて、「異邦人」とはユダヤ人以外の民族のことを示す言葉である。この「異邦人」をルカはどのように福音の中に位置づけていたのかが、研究テーマである。

ユダヤ人は、自分たちが神によって選ばれ、導かれた民として、強固な「選民意識」を持っていた。その選民意識の故に、他民族に対しては排他的・差別的な態度を取っている。ユダヤ人の歴史は、この「選民意識」による他民族への侵略であるが、その背景には何があるのか。また、選びの神ヤハウェは、真実の神を信じない「異邦人」への裁きと同時に、「不信仰なユダヤ人」に対しても裁きを行う。その頂点にあるのは、神による国の滅びである。ユダヤ民族を選び、導いた神が、最後はユダヤ人の不信仰を理由に約束の地を他民族に与え、民族は捕囚の憂き目を見る。このような歴史の過酷さの中でも、神信仰を失わず、選ばれた民の誇りを失わなかったのはなぜか。

本論では、旧約聖書における「裁きの神」の強い一面によって、「異邦人」への排他性・攻撃性が正当化され、カナン侵略が描かれていることを指摘する。ユダヤ人のカナン定着の歴史は、他民族の抹殺、殺戮の歴史である。そこには異邦人に対する憐れみ、配慮は見られない。「異邦人」は「異教徒」であるが故に、滅ぼされる運命にあると考えられている。

一方、新約聖書におけるイエス・キリストの言動は、「異邦人」に対する排他的・差別的扱いではなく、むしろ異邦人が神の国を継ぐ者との表現に示されるように、好意的に扱われる場面が多く見られる。

ルカは、「異邦人」が救いの対象になるのかという議論の渦中において、ユダヤ人だけが救いの対象であること原則を超えて、むしろ頑ななユダヤ人ではなく、異邦人の救いに強

い関心を示している。使徒言行録における初代キリスト教会の進むべき道が、大きく方向転換されるようになった経緯が、ルカ神学の随所に見られる。

ルカ自身がギリシヤ人であり、すなわち異邦人であったという事実が、異邦人の救いへの強い関心を生み出し、キリスト教が世界宗教へと発展する足場を作ったと考えられる。

現代社会の大きな潮流に、「インクルーシブ社会」への展望がある。福祉や教育、社会のあり方が、特定のマイノリティの人々を排除・差別するのではなく、包み込む共生のあり方が求められる時代になってきている。

キリスト教における「インクルージョン」思想の背景を探り、今日的な宗教的意義について探りたい。それは、とりわけ世界全体が、マイノリティへの排除や差別の方向性に突き進んでいるからである。今日の重いテーマとなっている「異邦人、すなわち他国民との共生」について、ルカ神学が私たちに何を指し示しているのか。

ルカの神学における「インクルージョン」思想を明らかにすることが、本論の趣旨である。それは、福音書や使徒言行録に示されている「排除されている人たち」を本質的には教会の宣教の対象としてこなかった現代のキリスト教会のあり方への批判、そして社会全体への批判についての示唆になると考えられる。

### 〈キーワード〉

異邦人、選民思想、インクルージョン、ルカの神学、共生と共同体への展望

## I. はじめに

### (1) ルカ神学の特徴

ルカ神学と他の新約聖書の記述との比較で言えば、大きな特徴として次の二点を持っていることである。

一点目は、特にマルコによる福音書では、イエスの死は「贖い」であることが強調されている(多くの人の身代金として自分の命を献げるために来た:10章45節)のに対して、ルカによる福音書では確実に「復活」に焦点を当てて書いている。復活後の顕現を婦人たち、エマオ途上の弟子たち、十二使徒たちに克明に示している(24章)。

二点目は、ルカは「異邦人問題」に強い関心を示している。初代教会では、ユダヤ人であれ異邦人であれ、他の国々の民を神が受け入れることについて、激論の種となっていた(使徒言行録15章等)。この問題の解決としてパウロはユダヤ教に改宗することが前提であるとする立場を取らない。それはルカも同様である。ルカは使徒言行録で「異邦人問題」をかなり重点的に示している。福音書においてはそれほど多くの記述はないものの、「異邦人」は神の恵みの領域内にあると理解している。

「異邦人」は、包括的なカテゴリーの構成員であると受け止めている。この構成員のリストには、

重い皮膚病等の障害者、サマリア人、病人、女性、罪人、徴税人、子ども、そして異邦人も含まれている。彼らは従来の宗教団体では排除の対象になっている者たちであるが、イエスに従う者たちの共同体では歓迎されている。

ユダヤ人の「選民思想」からすれば、異邦人は異教徒であり、真実の神を知らない人々であり、蔑みと排除の対象でしかなかった。それが、イエスの教えや行動によって、彼らも神の恵みの内にあることが示されていることを、ルカは疑うことがなかった。

ルカ自身が異邦人(ギリシャ人)であり、ユダヤ人の神に救われた者として、その救済の自覚を強く持っていたからに他ならない。

例えば、他の福音書を見ると、異邦人差別・排除が露骨に載っているところがある。

「自分を愛してくれる人を愛したところで、あなた方にどんな報いがあるだろうか。徴税人でも、同じことをしているのではないか。自分の兄弟にだけ挨拶したところで、どんな優れたことをしたことになろうか。異邦人でさえ、同じことをしているのではないか。」(マタイによる福音書 5 章 46 ~ 47 節)  
(注 1)

「あなたがたが祈るときは、異邦人のようにくどくどと述べてはならない。異邦人は、言葉が多ければ、聞き入れられると思込んでいる。」(マタイによる福音書 6 章 7 節)

「教会の言うことを聞き入れないなら、その人を異邦人か徴税人と同様に見なさない。」  
(マタイによる福音書 18 章 17 節)

これらの異邦人や徴税人に対する差別発言は、いずれもイエス自身の発言ではなく、マタイによる福音書の著者によって書き込まれたものであることは、その後の聖書研究で明らかにされている。イエスを異邦人や徴税人の立場に立って描いているのが、ルカ神学の特徴である。「排除リスト」に載る者たちが、ルカ神学では受容されている。それは、今日の言葉で言えば「インクルージョン(包括)」の思想である。境界線を引かないで、どのようなニーズ(困難さ)を持っていても迎え入れる共同体の理念である。(注 2)

ルカ神学の最大の特徴を、インクルージョンの理念を現しているものと理解できると思う。

## (2)「異邦人」問題の今日的な課題

「異邦人」問題は、今日で言えば「難民・移民」問題として国際社会に重要な課題として登場している。他国民・他民族の受入や共生の課題は、現在の国際的な政治的危機状況と相俟って、喫緊の課題となっている。政治的な秩序や国家の崩壊による「難民」や「移民」の受入をめぐる、国際社会が足並みを揃えてその負担を共同で負い合う認識が影を潜め、「排除と非寛容」の原理

に軸足を置く民族的ナショナリズムの台頭が、至る所で見られるようになってきている。イギリスのEU離脱もアメリカの超保守主義者の大統領候補者も、またシリアへの空爆に端を発したISの軍事行動やその反撃としてのテロも、いずれも「難民・移民」の受容を拒否することの要因となっている。

2016年9月に国連サミットが開かれ、難民の受入の分担について協議が始まった。紛争で家を追われた人々は、世界で6,500万人にも達し、第二次大戦後では最大となっている。難民は2,100万人に及び、特にシリア難民は480万人にもなっている。

難民の受入に中東諸国から、欧米諸国への分担を求める声が強くなる一方で、肝心の欧米諸国での消極姿勢が浮かび上がっている。

シリア難民の受入は、近隣諸国のトルコで250万人、レバノンで106万人、ヨルダンで63万人など、中東諸国で458万人に達しているが、ヨーロッパ各国では、ドイツで12万人、スウェーデンで5万人など、ヨーロッパ諸国で31万人となっている。難民問題のそもそもの要因を作り出したヨーロッパ諸国が、難民の受入に否定的であることに、国際社会は批判的である。

難民受入に拒否的なのは、それがテロに結びつきやすいという危惧からであり、同時に他国民を保護する経済的負担には限界があるという点である。かつて、中東諸国を侵略し、石油の利権を恣にしてきた西洋諸国が、自らの所業の反動を受けて、それを拒否するという道義上の不誠実を見せている。難民受入より、自国の利益優先を主張している。

第二次大戦後の民主主義は、多数派と少数派が支え合う自由な公共社会を目標にしていた。「難民・移民」は、世界全体から見れば少数派の代表である。彼らを受け入れてきた背後には、国内労働力不足の解消という社会的要請があった。また、移民や難民との共生は、西洋諸国の政治社会の基礎であったはずである。しかし、現在の国際情勢や政治状況は、多民族や多文化の共存とは大きく逸脱し、少数派の排除が公言される状況になってきている。

日本国内においては「ヘイトスピーチ」に示される「排除されるべき他民族」であるとの認識のもと、大きな社会問題や人権問題が起こっている。「ヘイトスピーチ」に対する政治的な対応ができつつある一方で、そのような少数派の切り捨て・排除が完全に解決しない背景には、自国民の利益優先のナショナリズムがあり、保守的政治家が後ろ盾になっていることがある。在日朝鮮人の問題は、国策による強制移民がその背景にあり、その彼らを排除・差別することは日本の歴史的汚点を直視しないことであり、それは西洋諸国の中東政策の失敗が現在のテロを生んでいることを認めず、難民・移民排斥に通底するものである。難民・移民の問題は、イスラム教とキリスト教との宗教的な対立構造とも言われるが、その根底に西洋諸国の強者の理論(植民地支配や石油利権の収奪等)の破綻と同時に、国内の格差社会、若者の貧困などの政治不信が見られる。

もう一度、宗教における「隣人思想」にもとづく「共生社会」こそが、人類が生き延びる唯一の道であることを学びたい。

ルカ神学の示す異邦人理解は、そもそも宗教における他民族との共生を可能にするものと考えられるからである。

## Ⅱ. ユダヤ民族の選民思想

### (1) 申命記における選民思想

ユダヤ民族は、自分たちが神によって特別に選ばれた民族であることに強い誇りを持つ民族である。「選ばれた民族」の意識は、他民族に対する強い優越感を抱かせるものである。

あなたは、あなたの神、主の聖なる民である。あなたの神、主は地の面にいるすべての民の中からあなたを選び、ご自身の宝の民とされた。主が心引かれてあなたたちを選ばれたのは、あなたたちが他のどの民よりも数が多かったからではない。あなたたちはどの民よりも貧弱であった。ただ、あなたに対する主の愛のゆえに、あなたたちの先祖に誓われた誓いを守られたゆえに、主は力ある御手をもってあなたたちを導き出し、エジプトの王、ファラオが支配する奴隷の家から救い出されたのである。(申命記 7 章 6～8 節)

エジプトにおける奴隷状態にあったユダヤ民族を、ファラオの支配から解放し、約束の地「乳と蜜の流れるカナン」へ導き出した方は、彼らの主である神であった。カナンへの定着に至る道は、侵略と征服であり、他民族を徹底して殲滅してそれが可能となった。

あなたにまさる数と力を持つ七つの民、ヘト人、ギルガシ人、アモリ人、カナン人、ペリジ人、ヒビ人、エブス人をあなたの前から追い払い、あなたの意のままにあしらせ、あなたが彼らを撃つときは、彼らを滅ぼし尽くさなければならない。彼らと協定を結んではならず、彼らを憐れんではならない。(申命記 1 章 1～2 節)

われわれはヘシュボンの王シホンにしたように、彼らを滅ぼし尽くし、町全体、男も女も子どもも滅ぼし尽くしたが、家畜と町から分捕った物はすべて自分たちの略奪品とした。(申命記 3 章 6～7 節)

申命記に見られるように、ユダヤ人、すなわちヤハウェを信じる民の歴史は、殺戮と虐待の歴史であった。自分たちが「選ばれた特別の民」であるという意識が、周辺の諸民族への敵対意識の高揚へと繋がっていった。

選ばれた特別の民は、神によって与えられた「律法」(タルムード)を遵守することによって、神との特別な契約を結んだ民となった。「律法」はユダヤ民族にとって、民族の証であり、選民を選民たらしめるものであった。律法を知らず、神との契約のない他民族は、穢れた異邦人として、徹底的に憎悪され、差別された。滅ぼされて当然である対象と考えられていた。異邦人に対する寛容さや共生は、ユダヤ人の歴史には基本的には存在しない。

## (2) 捕囚期の選民思想

唯一神ヤハウェを信ずるユダヤ教は、その本来の特徴から、閉鎖性と孤立性を秘めている。神から与えられた律法遵守は、ユダヤ民族を神に選ばれた民とするものであり、この一点が他民族との相違を明確にしている。そのことは、他民族との共生、融合を決して許さないことになる。

だが、紀元前 587 年、バビロニア帝国の侵攻により南ユダ国の首都エルサレムが陥落。その後、ユダ国の王家をはじめとする生き残った大勢のユダヤ人がバビロンへ強制移住される出来事が起り、捕囚期は 70 年に及んだ。しかし、ペルシャ帝国の台頭によってバビロニアが滅ぼされると、捕囚の民はユダ国への帰還が許された。だが、荒廃したユダ国へ帰還した者は多くはなかった。生活の基盤が、すでにバビロンにできつつあったからである。

さて、ここで問われるのは、国が滅ぼされたユダヤ民族にとって、選民思想はどう変化したのか、ということである。もう一点は故郷から離れて生きることを余儀なくされたユダヤ人にとっての選民思想とは何かである。

### ① 国の崩壊と選民思想

ユダ国が滅ぼされ、バビロンへ強制移住させられ、捕囚の民となったユダヤ人は、自らの「選民思想」をどのように捉えたのか。一般的な土着宗教であれば、人々に大いなる恵みを与える神を信じ、その神への信仰があっても災いに遭うことが起これば、その神は人々から廃棄される。当時のパレスチナにあった「バアル信仰」は、自然の豊潤さを約束する「バアル神」への宗教であった。だが、不作や災いが続くと、人々は新たな神を立てて拜むのが常であった。宗教は信じる者の命を守る「御利益宗教」であった。

神によって与えられた土地に建てた自分たちの国が、外敵によって滅ぼされたら、その神には民を守る力のないものとして棄却されるべきものであった。しかし、ユダヤ人はそうしなかった。むしろ、自分たちに起きた破滅的な出来事を、真剣に神を信じなかったことへの神の裁きと捉えた。ここに信仰の内省化が示されている。神との契約の中で自分たちがそれを破ったことへの神の怒りと受け止めたのである。

「選民思想」は、地上での繁栄を約束するものではなく、神との特別な契約によって、神と向き合う生き方の意識に変わっていった。むしろ、祖国の滅亡のうちに、神への復帰の動きが始まったのである。他民族との比較における「選民思想」ではなく、信仰の純化がそこに示されるものとなっていった。

### ② ディアスポラ(離散したユダヤ人)の選民思想

バビロン捕囚に見られるように、ユダヤ人は安定した国家に留まる民族ではなく、戦火によって国を追われる民として世界中に散らばせられた。

ディアスポラのユダヤ人は、バビロン捕囚の時代から始まっている。紀元前 400 年前には、エジプトに多くのユダヤ人が住んでいたことが知られている。当時の大都市にはかなりのユダヤ人が生活の基盤を持って暮らしていた。では、そのようなディアスポラは、彼らの生きる根拠となっているユ

ダヤ教とどのような関わりがあったのか。

バビロン捕囚期に、ユダヤ教の内省化が起こり、神殿宗教から律法の宗教になり、会堂や集会の家によって、信仰の保持が図られるようになった。神殿宗教とは、出エジプト記 34 章に示される、神との契約の民は年三回礼拝所巡礼と献納を行うことが要求されることである。神殿崩壊後は、行為による儀礼よりも律法の内実化の重点が置かれるようになった。共同体は律法厳守による強い絆が人々を支配した。だが、一方でこのようなディアスポラの成文法があっても、祖国から離れたユダヤ人は、その土地の人々との関わりの中で生きることが求められるが故に、そこから逸脱する人々も多くいたのである。(注 3)

ユダの国が復興されたとき、ユダに住み着いていた多くの住民が排斥されるに至った。それは、外国人女性との結婚によって生まれた子どもたちである。ネヘミアによるユダの国の復興時には、ユダヤの言葉を話せない子どもたちが多かったという。民族的な純潔を求める律法は、異教の人々やその子どもたちを排除することを求めた。

後の時代にナチスは、ニュルベルク法を起草する際にモデルにしたのが、エズラ・ネヘミアの法であると述べている。事実、ナチスも民族の純潔を何より重要とした。(注 4)

民族の優位性の故にユダヤ人の抹殺を図ったナチスの理論の中核が、選民思想から生まれた民族の純化、即ち異邦人の排除を根幹とするユダヤ民族の孤高性にに基づいたものであったことは、歴史の皮肉としか言いようがない。自分たちの民族の優越性が、ナチスの思想の根底を形成したのだから。

### (3) ホロコースト以降の選民思想

なぜ、ナチスはユダヤ人の大量虐殺に至ったのであろうか。民族の抹殺という憎悪の極みには何があったのか。原因は非ユダヤ人をユダヤ人と同列に扱うことを頑なに拒むユダヤ人の「優越意識」に対する憎悪である。選民思想は、対外的に様々な民族や文化との接触の中で、明確に他者に知られていく。自分たちだけが選ばれた者、優れた者という意識は、結局周囲の人々の妬みや悪意を引き出すことになる。そのようなユダヤ人の優越感や独自性が西洋社会の長い歴史の中で蓄積され、世界中にユダヤ人に対する憎悪の念が固定化されていった。ナチスはそれを利用したのである。ナチスによるホロコーストに対して当時の欧米の列強諸国が強硬に反対しなかったのも、また、カトリックのポーランド人の虐殺に沈黙を守ったバチカンも、底流にあるユダヤの優越意識に反感を抱いていたからである。

さて、あのようなユダヤ人の大量虐殺が起こった後に、そのことをユダヤ人はどう捉えたのか、何を考えたのであろうか。

ナチスの創設者の一人と考えられ、ユダヤ教とシオニズムの抹殺に専念したA. ローゼンバーグは、特に二人のユダヤ人を悪魔として敵視した。その一人は平和同盟の中心人物であるユダヤ教の哲学者マルティン・ブーバーである。今日に至るまで最も著名なユダヤ教の哲学者であるM.

ブーバーは、ホロコーストについて次のような態度を取ったと記されている。

ブーバーは背が低く、ぼさぼさの髪をして長い白髭を顎に生やしていた。さしずめ旧約聖書の預言者の生まれ替わりといったところだ。あの夕べの講義の一瞬間を私は今でもはっきり覚えている。

ブーバーは講演台の向こう側に立って、人間の条件だとか、神だとか、アブラハムの契約だとかについて話をしていた。その時急に、前にあった大きな重い聖書を両手でつかみ、できるだけ高く頭の上に持ち上げてから講演台の上に投げつけるように落とし、両腕を一杯に伸ばしたまま、こう絶叫した。「強制収容所でのあの大虐殺が起こってしまった今、この本が何の役に立つというのか!」ブーバーは、神がユダヤ人に対して行ったことに憤慨していたのである。無理もない。(注5)

ブーバーはホロコーストによって600万人のユダヤ人が虐殺されたことを、神がなぜ許したのかと神の沈黙を問う。だが、その問いに対する答えを求め続けながらも、彼は信仰から離れることはなかった。この世的には民族の崩壊に至った出来事に、「選ばれた民族」の意識は、どのように継承されたのであろうか。

ユダヤ教神学者のベックは、次のように述べている。

「古い諺に寄れば、イスラエルはトーラー(律法)のために存在させられたと言われている。しかし、トーラーもまた、この地上でそれを守る人間によってのみ存在できる。もし、地上でユダヤ民族が絶えたとしたら、トーラーもまたその姿を消したであろう。…ユダヤ人が存在しているという事実が重要であった。その義務に限りがないように、また存在する意義もつぎることはない。決して妥協しない共同体として存続すること、この世に合って、しかもこの世と異なるものであること、それがユダヤ人の任務である。…ユダヤ人は自己に忠実であることによって、神が真実でありたもうことを体験したのである。」

(注6)

プロテスタントの神学者K. バルトは、かつてプロイセンのフリードリッヒ大王の発した質問とその答えの逸話を教義学で取り上げている。それは神の存在証明である。大王の質問に侍医は、神の存在はユダヤ人の存在が証明していると答えた。バルトはこの逸話から次のように語っている。「多くの諸民族のただ中におけるユダヤ民族の存在の中に、神によって示された唯一の自然な神の証明がある」と。(教会教義学第一巻第二分冊)カントによってあらゆる哲学的な存在証明は不可能と結論づけられたが、バルトは、神によって選ばれし民のユダヤ民族の存在そのものが、神の存在を証明していると言う。幾多の民族が歴史の彼方に消えていった人間の歴史の中で、かくまで過酷で悲惨な状況にもかかわらず、民族が途絶えなかったことに、バルトは神の選びを見ている。

ユダヤ人はその民族の始まりと同時に、幾多の苦難を生き抜いてきた。民族絶滅の危機にあっても、その危機を招いた原因を、自らの神に対する不信仰とした彼らは、神への信頼を失うことはなかった。

#### (4) イエス・キリストの系図における異邦人の理解

ユダヤ民族は神に選ばれた特別の存在、すなわち「選民思想」をその歴史の中心に置いている。他の民族とはその出自から違って、神による特別な恩恵を受けたものとされている。特別な民族には他の民族を隔てるための「律法」が存在する。神の律法を守る者が選ばれた民に相応しいものとなる。この律法遵守に民族は他の民族との違いを鮮明にする。律法を持たない他民族は、「異邦の民」として低いものとされている。この故に異邦人を蔑み、排除するのがユダヤ民族である。

ところがユダヤ民族の歴史の中で、この異邦人に重要な役割を与え、民族の礎とされている者も聖書の中に多く登場する。まして、男尊女卑の社会にあって、一段と低められた女性、しかも遊女がユダヤ民族の歴史上重要な役割を果たした例もある。ヨシュア記に登場するラハブである。モーセの後継者であったヨシュアは、神の命に従ってエリコの町を攻め取ろうとする。だが堅固な城壁に守られたエリコの町は容易に陥落しない。そこで斥候を町に潜入させるが、その手引きをしたのがラハブであった。異邦人であり、女性であり、遊女であるという誇り高きユダヤ民族からすれば、本来であれば歯牙にもかからない者が神によって選ばれて、神の計画の中に入れられたのである。排除されるべき者が、歴史的人物になる。ここにインクルージョンの事例が示されている。

ユダヤ民族が王制国家となる前に登場するのが、士師と呼ばれる人たちである。ヨシュアの死後、他民族の侵略を受けたユダヤ民族の救済のために歴代の英雄が立ち上がる。彼らは「士師」という民族の指導者である。この時代に一人の異邦人の女が登場する。名をルツという。彼女の夫はユダヤ人であるが、飢饉のため自国を出て異邦の地モアブに赴き、そこで妻を得る。モアブ人である妻ルツは異邦の民である。ところが夫が亡くなり、その母がユダの地に帰ろうとするとき、ルツは姑に寄り添ってユダに帰還する。ルツは異民族の土地で姑に仕えて生きることを決心し、やがてユダの地で新たな夫ボアズを得るという結末を迎える。ルツの産んだ子はオベドと名付けられた。オベドからエッサイが、エッサイからダビデが生まれた。イエス・キリストはダビデの子孫とされていて、その系図がマタイによる福音書の冒頭に記載されている。このイエス・キリストの系図に異邦人であるルツが登場している。遊女ラハブも同様に系図に記載されているが、このラハブからルツの夫であるボアズが生まれている。

こうしたキリストの系図を見ると、頑なな選民思想による異邦人への排他的な扱いをしてきたユダヤ民族の中に、本来あるべきではない異邦人が重要な役割を果たすために登場していることが分かる。救い主イエス・キリストやその弟子たちは、ユダヤ民族にとって敵である異邦人を宣教の対象にしていることが読み取ることができる。ユダヤ教からキリスト教への移行の中に、異邦人に

対する寛容、全ての民族に注がれる神の愛の普遍性を見ることができる。これはキリスト教におけるインクルージョンを示す事例となっている。

#### (5) ナザレ人イエス

イエスは「ガリラヤ人」であった。イエスの生まれ育った「ナザレ」はガリラヤの地方にあり、イエスの活動拠点として知られる「カファルナウム」は、ガリラヤ湖畔に位置している。首都エルサレムから見れば、北方辺境の「田舎」であった。

ガリラヤは、イスラエル国の分裂後に、「北イスラエル国」に属し、やがてアッシリアによって国家が滅び、その後、バビロニア、ペルシャ等の大国の支配下に置かれるようになる。その間に「異邦人のガリラヤ」という蔑視的な見方が広がっていく。他民族の支配下に人種や宗教における混交が進んだからである。「サマリア人」ほどの差別ではなくても、ガリラヤへの差別感情はユダヤ人の間では一般的であった。そのため「異邦人のガリラヤ」という差別表現は、聖書の中に多く出てくる。

「ナザレ人イエス」の表現にも、差別的な悪意に満ちた感情が込められている。イエスの福音宣教がユダヤ人社会で大きな評価を集めることになると、ユダヤ教の指導者によって、悪意のあるニュアンスになっていく。単なる出自を示すものではなく、異邦人に近いものであること、また、罪人や徴税人の仲間であることから、まともな人間ではなく「悪霊に取り憑かれた者」という意味を込めて、「ナザレ人イエス」と呼ぶようになっていった。(注7)

イエスに反対する人たち、すなわち律法による自己義認を求める正統派ユダヤ人にとって、イエスは唾棄すべき異邦人のたぐいと考えられたのである。

イエス自身が異邦人に近い者であることが、異邦人に対する差別・排除の感情から遠く放たれていたことに他ならない。

### Ⅲ. ルカ神学の異邦人理解

#### 1. ルカによる福音書、使徒言行録に登場する異邦人

##### (1) 善きサマリア人のたとえ(ルカ:10章15～37節)

ある律法学者が立ち上がり、イエスを試そうとして言った。「先生、何をしたら永遠の命を受け継ぐことができるでしょうか。」イエスが、「律法には何と書いてあるか。あなたはそれをどう読んでいるか」と言われると、彼は答えた。「『心を尽くし、精神を尽くし、力を尽くし、思いを尽くして、あなたの神である主を愛しなさい。また、隣人を自分のように愛しなさい』とあります。」イエスは言われた。「正しい答えだ。それを実行しなさい。そうすれば命が得られる。」しかし、彼は自分を正当化しようとして、「では、私の隣人とはだれですか」と言った。イエスはお答えになった。「ある人がエルサレムからエリコに下っていく途中、追いはぎに襲われた。追いはぎはその人の服をはぎ取り、殴りつ

け、半殺しにしたまま立ち去った。ある祭司がたまたまその道を下ってきたが、その人を見ると、道の向こう側を歩いて行った。同じように、レビ人もその場所にやって来たが、その人を見ると道の向こう側を歩いて行った。ところが、旅をしていたサマリア人は、そばに来ると、その人を憐れに思い、近寄って傷に油とぶどう酒を注ぎ、包帯をして、自分のろばに乗せ、宿屋に連れて行って介抱した。そして、翌日になると、デナリオン銀貨二枚を取り出し、宿屋の主人に渡して言った。「この人を介抱してください。費用がもっとかかったら、帰りがけに払います。」さて、あなたはこの三人の中で、だれが追いはぎに襲われた人の隣人になったと思うか。律法の専門家は言った。「その人を助けた人です。」そこでイエスは言われた。「行って、あなたも同じようにしなさい。」

キリスト教徒でなくても、よく知られている記事である。「善きサマリア人のたとえ」は、キリスト教の博愛主義を端的に現すものとして広く受け止められている。

イエスの語ったたとえ話は、律法学者の質問に対する回答である。永遠の命を受け継ぐためには何をしたら良いのかと問う律法学者に対して、申命記6章の律法を引いて答える。それは律法学者が知らないで質問したわけではなく、知っていてイエスを試そうとしたものである。当時の人々はこの言葉を「シエマの祈り」として日に二回唱えていた。シエマの祈りとは、ユダヤ教の朝夕の祈りである最初の二語である「シエマ・イスラエル」は、イスラエルよ、聞けの意である。神への愛と隣人への愛は律法の中核であり、知らぬ者などいない、まさに律法が社会の中心である世界であった。しかも、律法学者は律法に隣人の規定のないことを理由に、「誰が隣人なのか」と再び質問する。その根底には自分たちユダヤ人が神から無償の恵みを得ているにもかかわらず、誰をその対象として慈愛の手を差し伸べるのかと問うのである。問い自体が既に神の恵みから逸脱することは明白である。これに対する回答が、「善きサマリア人のたとえ」であった。

ここには四人の登場人物がある。神殿礼拝から帰る途中に盗賊に襲われたユダヤ人であり、半死半生の目に遭って道に横たわっている。そこを三人の人物が通りかかる。一人は祭司である。律法を忠実に遵守し、人々をそのように教え導く者である。もう一人はレビ人である。彼らはエジプト脱出の際に、12部族に分けられた一つの部族であったが、その後神殿管理を職とする者として、嗣業地を持たず、祭司を輩出する部族となった。従って祭司と並んで人々の尊敬を受ける地位にあった。彼らは、地に倒れたユダヤ人を見て、傍らを通り過ぎていった。自分たちの身の安全を優先したのか、あるいは死者に対して埋葬の義務を負うことから、聖職者は免除されると考えたからである。

ここに登場するのが、サマリア人である。歴史的には、ソロモン王の治世の後、ユダヤ国家は北イスラエル王国と南ユダ王国に二分した。北イスラエル王国は、アッシリアによって陥落し、多くの国民が捕囚の民となり、元の領地はアッシリアから移住者によって民族や宗教の混交が行われた。民族や宗教の純血を求めるユダヤ人からは、差別と排除の対象になった人たちである。今日では、ユダヤ教の一派として存続しているが、律法の点から蔑みの対象となっている。このサマリ

ア人が傷ついたユダヤ人を助け、介抱して宿屋に運んだ。

イエスは、強盗に遭った人の隣人とは誰かと律法学者に問う。彼はサマリア人であると答えると、「行って、同じようにしなさい」と言う。

大変よく知られた物語であるが、これを単なる道徳訓に解釈することは間違いである。後世、キリスト教の博愛主義として理解され、アメリカには「善きサマリア人の法」が作られ、窮地の人を救った善意の行為であればその救助の結果は問われないという趣旨の法がある。人間の善意を広く知れ渡らせる物語として有名である。

公民権運動の黒人指導者であったキング牧師は、人種差別としてこの記事に触れている。瀕死の重傷を負っている黒人を見て、一顧だにせず通り過ぎる白人の姿をこの物語から読み取っている。

だが、一般的な解釈である「慈悲と憐れみを必要とする者は誰彼を問わずに助けよ」という愛の道徳訓として捉えるは本筋ではない。それは慈悲的な行為による信仰義認（神の前に正しいとされること）ではなく、自分の正しさを示そうとするユダヤ教律法主義への反論として捉えるべきものである。もちろん、「隣人とは誰か」と愛に値する人を捜し求め、選り好みする高慢に対して、愛の本質を示す点もある。人を助ける行為によって、人は神の義を得るのではない。人は神への真摯な信仰によって義とされる。このことこそ、読み取ることが重要である。（注 8）

## (2) サマリアの重い皮膚病患者の癒やし（ルカ：17 章 11 ～ 19 節）

イエスはエルサレムへ上る途中、サマリアとガリラヤの間を通られた。ある村に入ると、重い皮膚病を患っている十人の人が出迎え、遠くの方に立ち止まったまま、声を張り上げて「イエスさま、先生、どうか私たちが憐れんでください」と言った。イエスはそれを見て、「祭司たちのところに行って、体を見せなさい」と言われた。彼らはそこへ行く途中で清くされた。その中の一人は、自分がいやされたのを知って、大声で神を賛美しながら戻ってきた。そして、イエスの足もとにひれ伏して感謝した。この人はサマリア人だった。そこで、イエスは言われた。「清くされたのは十人ではなかったか。ほかの九人はどこにいるのか。この外国人のほかにも、神を賛美するために戻ってきた者はいないのか。」それから、イエスはその人に言われた。「立ち上がって、行きなさい。あなたの信仰があなたを救った。」

従来の聖書には「らい病」と記載されていたが、その言葉が差別用語とされたために「重い皮膚病」の言葉に置き換えられた。ヘブライ語では「ツァーラート」と言い、これは特定の病気というより、むしろ宗教的祭儀的な「穢れ」の観念に基づく皮膚疾患の総称である。衣服や家屋の「かび」や「しみ」もその名称で呼ばれていた。ハンセン病がパレスチナに入ってきたのは、紀元前 4 世紀のことであり、考古学的には、「ツァーラート」は「ハンセン病」と同一ではない。ギリシャ語の「レプラ」も基本的に「ツァーラート」に対応するものであり、ハンセン病と断定することは難しい。学者の中で

も、ハンセン病に係る差別的事象からの脱却のために名称変更したことに抵抗感を持つ人も多い。「重い皮膚病」としたことでは、本来の宗教的な穢れの意味が見えてこないからである。(注9)

旧約聖書には「重い皮膚病」について、次のように記されている。

「重い皮膚病にかかっている患者は、衣服を裂き、髪をほどこき、口ひげを覆い、『わたしは汚れた者です。汚れた者です』と呼ばわらなければならない。この症状がある限り、その人は汚れている。その人は独りで宿営の外に住まねばならない。」(レビ記 13 章 45,46 節)

この病気は、神の怒り、神の罰としてもたらされたものであると、民数記に記されている。

「ミリアムは重い皮膚病にかかり、雪のように白くなっていた。・・・アロンはモーセに言った。『わが主よ、どうか、私たちが愚かにも犯した罪の罰を私たちに負わせないでください』。・・・」(民数記 12 章 9～13 節)

一方で、ツァーラートは不治の病ではなく、治療したものに対して「清めの儀式」が行われていた。清めの儀式を祭司が行うことは、この病そのものが神の罰とされていたからである。さらにタルムードの中で、ツァーラート患者に対して接近して良い距離(風のある場合は 45 メートル、風のない場合は 1.8 メートル)と規定されていた。

それ故、ツァーラート患者は人々とは離れて暮らしていて、自分たちのコロニー(居留地)を形成していた。社会的にも宗教的にも排除されたグループとしての存在であった。

この物語の意味するところは次の二点であろう。

一点目は、「癒やし」は「救い」と同義であることである。ルカ伝 19 章に登場する徴税人ザアカイの物語は、イエスが社会的に侮蔑の対象となっている徴税人の家に泊まるという記事である。失われた者を求め、「救う」ためにイエスはこのザアカイのところに来たのである。ここで使われている <σωτηρια> は、「癒やし」とも訳される言葉である。この物語は、癒やされた十人と救われた一人の物語である。

二点目は、信仰によって救いを得た者は、二重に排除されている外国人ということである。ルカは、社会から阻害されている人々を重点的に取り上げる。それはルカの顕著な傾向性である。

サマリア人は、かつて北イスラエル王国が滅び、他民族の支配を受けた時代に、人種的宗教的混交によって、民族や宗教の純潔が失われた人々である。聖書には、このサマリア人の土地を通ることを拒否して、何日もかけて遠回りするユダヤ人が描かれている。彼らは、ユダヤ人からすれば、社会的な爪弾き者であり、宗教的な異端者であった。さらに、彼はツァーラート患者であった。

だが、ここで注目すべきは、ツァーラートを患っている人々のコロニーでは、ツァーラートという重い課題を担う彼らには、ユダヤ人か異邦人かの問題は大した問題ではなくなっていたのである。障害が彼らを含む(インクルード)した集団にさせていたのである。

さらにこの物語は、この後起こる使徒言行録の先取りとして登場している。それは、イスラエルの中で、メシア(救い主)を認めない多くのユダヤ人がいる一方で、異邦人の中でキリストが受け入れられていくということである。

この物語には、明らかにそれを反映させる先行記事があり、ルカはその記事を熟知していたと思われる。それは列王記に示されるナアマンの記事である。

アラム王の司令官ナアマンは、重いツァーラートに罹っていた。イスラエルとの戦いの中で捕虜として連れてきた少女が、サマリアの預言者に行けば、病は癒やされると伝える。そこでナアマンは、その地へ赴き、預言者エリシャに会うと、「ヨルダン川の水で七度体を洗いなさい」と告げられ。その通りに実行するとツァーラートは癒やされた。(列王記下 5 章 1～18 節)

ツァーラートから救い出した神は、本来敵であり、救いの対象ではない異邦人に救いと信仰を与えた。この記事が、ルカにとって念頭にあったのであろう。ルカは、イエスの物語を、旧約聖書の様々な物語の類型に沿って著述することを好んでいる。異邦人の改宗が、この物語の主題となっている。(注 10)

それと同時に問われているのは、病気から癒やされたユダヤ人がイエスのもとに来て感謝の念を献げなかった点である。本来救われるべきユダヤ人の癒やし(救い)に異邦人が加えられた物語であるが、ユダヤ人は救い主の前に登場しないで立ち去っていく。

この物語に示されているのは、異邦人も救いの対象になっていると同時に、ユダヤ人も裁きの対象にあるということである。神は信ずる者を救われる。異邦人であっても変わりはない。しかし、選別の民であるユダヤ人を含めて、全ての人は神の裁きの前に立つものであることが示されている。

### (3) 七名の執事の選び(使徒言行録 6 章 1～7 節)

そのころ、弟子の数が増えてきて、ギリシャ語を話すユダヤ人から、ヘブライ語を話すユダヤ人に対して苦情が出た。それは日々の分配のことで、仲間のやもめたちが軽んじられていたからである。そこで、十二人は弟子をすべて集めて言った。「私たちが神の言葉をないがしろにして、食事の世話をするのは好ましくない。それで、兄弟たち、あなたがたの中から、“霊”と知恵に満ちた評判の良い人を七人選びなさい。彼らにその仕事を任せよう。わたしたちは祈りと御言葉の奉仕に専念することにします。」一同はこの提案に賛成し、信仰と聖霊に満ちている人ステファノと、ほかにフィリポ、プロコロ、ニカルノ、ティモン、パルメナ、アンテオキア出身の改宗者ニコラオを選んで、使徒たちの前に立たせた。使徒たちは、祈って彼らの上に手を置いた。こうして、神の言葉はますます広まり、弟子の数はエルサレムで非常に増えていき、祭司も大勢この信仰に入った。

初代教会の中には、ギリシャ語を話すユダヤ人やヘブル語を話すユダヤ人がいたと記されている。原語では、前者はヘレニストとなっている。「ヘレニスト」とは、ギリシャ文化を理解する者の意であるが、これには諸説があり、異邦人キリスト者、改宗者、ディアスポラ・ユダヤ人、律法に自由

なシリア・アンティオケのキリスト者などである。研究者の多くは外国で生まれ育ち、ギリシャ語を話すユダヤ人が多くエルサレムに住んでいた人々と考えている。この人々と生まれついでユダヤ人との間に、律法遵守に関して対立点があったと想定される。律法はユダヤ人をユダヤ人たらしめる重要な民族の象徴であり、キリスト教といえどユダヤ教の一派と考えるユダヤ人のキリスト者も少なくはなかったからである。それは教義上の問題だけでなく、日常の教会生活を巡る問題としても課題が浮かび上がってきたと考えられる。

聖書の記事には、初代教会が貧しい信徒のために食物の配給を行っていたことが記されている。問題となったのは、ギリシャ語を使うユダヤ人のグループにいたやもめたちが、配給の援助に与れなかったことに端を発している。おそらくは、ギリシャ文化に馴染んだ人々を好ましくは思わない律法主義者たちによる排除や無視がそこにあったものと考えられる。

そこで十二使徒は弟子全員を集めて会議を行った。使徒たちは、自分たちの本来の役割は宣教であり、神の言葉に仕えることを本旨としているので、日々の食料の配布は使徒を補佐する信仰深い人を選び、担当させることにした。そこで教会は信仰深く評判の良い七名を選び出し、任に当たさせた。彼らを選ぶ基準は、人間的な魅力や能力、財産、社会的な地位等ではない。神の選びは人間的な判断基準を超えている。この七名の中には、最初の殉教者であるステパノも含まれている。

この七名の執事(今日の教会制度の名称)は、全員がギリシャ人、すなわち異邦人であった。彼らは異邦人伝道の積極的な担い手になっていく。

この聖書の記事は、初代教会が、ユダヤ教律法主義から解放されたことを意味している。すなわち、律法遵守による神の義ではなく、信仰による義こそが初代キリスト教の教義であることを示している。同時に、ユダヤ教から派生した分派という理解ではなく、全く新しい教義に基づいた宗教団体の誕生が示されている。さらには、ユダヤ教の時代には、信仰の対象とは決して認められなかった異邦人が、教会の中心として位置づけられるようになり、ここから異邦人伝道が本格化したということである。

旧約聖書の時代から新約聖書の時代への移行は、異邦人を含む全ての人間の救いの宗教へと発展していったエポックメイキングな出来事が、七人の執事の選びであった。

#### (4) コルネリウスの選び(使徒言行録 10 章 1～8 節)

さて、カイサリアにコルネリウスという人がいた。「イタリア隊」と呼ばれる部隊の百人隊長で、信仰心あつく、一家そろって神を畏れ、民に多くの施しをし、絶えず神に祈っていた。ある日の午後三時ごろ、コルネリウスは神の天使が入ってきて、「コルネリウス」と呼びかけるのを、幻ではっきりと見た。彼は天使を見つめていたが、怖くなって、「主よ、何でしょうか」と言った。すると、天使は言った。「あなたの祈りと施しは、神の前に届き、覚えられた。今、ヤッフェへ人を送って、ペトロと

呼ばれるシモンを招きなさい。その人は、革なめし職人シモンと言う人の客になっている。」天使がこう話して立ち去ると、コルネリウスは二人の召使いと、側近の部下で信仰心のあつい一人の兵士とを呼び、すべてのことを話してヤッフェに送った。

カイサリアは地中海に向かってパレスチナの門を開く代表的な町であり、ユダヤのヘロデ王はこの町を作るのに、12年を費やしたとして知られている。カイサリアはパレスチナーのヘレニズム都市であり、民族的にはヘロデの町、忠誠の点ではローマの町、文化の点ではギリシャの町であった。この町は、ローマ帝国への抵抗独立運動が起こった町として知られている。それは単に反ローマだけでなく、ユダヤ人内部の親ローマ派と抵抗派の分裂、さらにユダヤ人对異邦人の問題も複雑に絡み合っていた。

ルカは、ユダヤ独立戦争の余波の残るこの町で、神がユダヤ人と異邦人を共にかえりみて働きたもう出来事を語っている。神を敬う人として登場するコルネリウスは、ローマ軍の精鋭である百卒長であり、ユダヤ教会堂に熱心に入出入りして礼拝を行うが、割礼を受けていない。(ユダヤ人は生後7日目に割礼を受け、神に献げられた者となる)

このコルネリウスに天使が訪れ、使徒ペトロを招くようにと命令する。同時に天使はペトロにも働きかける。ペトロはコルネリウスの使いの者と一緒にカイサリアに出かけ、一族郎党が待ち望んでいるコルネリウスの家に入る。ペトロは家に入る前に、ユダヤ人の律法では外国人と交際することが禁じられていることを告げ、だが、神がどのような者も穢れている者と言ってはならないとあらかじめ示されたことを述べ、コルネリウスの一族に福音を語る。ペトロの説教中に、聖霊が一同の上に下り、異邦人である彼らが神を賛美するのを聞いて、ペトロはイエス・キリストの名によって洗礼を受けた。

異邦人伝道は、使徒職にある者が一方的に福音を語り伝えていくものではない。神の聖霊がそこに注がれるときに、異邦人伝道が可能となる。何よりも、信者だけに注がれる聖霊(神の恵み)ではなく、異邦人の上にも注がれることは、異邦人も救いの計画に入れられていることを示している。ユダヤ人と異邦人の「隔ての中垣」が打ち破られる。

同時に信仰への道は、人を介して起こることを聖書は伝えている。コルネリウスにもペトロにも、神が言葉をかけ、そこから出会いが起こる。

さらに次の点も示されている。すなわち、ローマ軍の百卒長はユダヤ人にとって支配する者の代表である。ローマからの独立を望み続けるユダヤ人にとって、彼らは敵そのものである。事実、ルカが使徒言行録を著したのはAD80年頃と推定されるが、その直前の75年に起こったエルサレム陥落(独立戦争が起こってユダヤ人数万人が虐殺された)が、ユダヤ人にとって民族的な惨劇として記憶に残されている。聖書の出来事はそのような場で起こったことであることを知らされる。それは敵である者も神の救いの計画に入っていることが、ここで明らかにされている。ユダヤ民族の苦難の直中で、コルネリウスの回心が起こったのである。福音とは何か、それは、「汝の敵を愛

せよ」の言葉に尽きる。民族・人種を越えて支配したもう神の御計画にある救済の業に従うことを意味している。

### 3. インクルージョンの視点から見る異邦人

#### (1) 選びの民的としての異邦人

申命記における異邦人は、他の神々と結びついている異邦人と、神との契約の法のもとにあるユダヤ人とはきっぱりと分離され、カナン人(異邦人)の祭儀との関係に入ることを厳しく禁じている。ただし、パレスチナに定着した原住民族のうち、比較的後代の住民層で、ユダヤ民族には属しないが親縁関係にある者たちについては、配慮されている。

他民族との混血や他民族の者は、十代目になっても主の会衆に加わることはできないが、エドム人(ユダヤの兄弟民族:ヤコブの兄エサウの子孫)とエジプト人(かつてユダヤ民族はエジプトに寄留していた)の三代目は、ユダヤ人の会衆に加わることができたとされていた。(申命記 23 章)

また、パレスチナの宗教的行事であった収穫祭は、神によってユダヤの土地になったが、伝統的行事をそのまま残して「七曜祭」とした。土地取得は、パレスチナを神の与える約束の地として、先住民族から奪い取ったものであるが、エジプトで奴隷状態にあったユダヤ人を神は選び、約束の嗣業を与えたことを記念して、先住民族の神々に献げる収穫祭から、ヤハウェへの感謝への祭りとなったものである。出エジプトの次の日から 49 日目がそれに当たるが、土地に伝わる農耕的な宗教儀式を、自分たちの存在意義を明確にする宗教儀式に変えていった。後に、初代キリスト教会誕生の出来事となる聖霊降臨は、この日に起こったことが使徒言行録に記されている。

異教の習慣を、ユダヤ教独自の「神と民族の契約」の意識化を図るものへと変質させていく。ここに「選民思想」のモチーフを明瞭に見ることができる。「異教の民から奪い尽くせ」の神の言葉は、「侵略・略奪」であった民の歴史を、文字通り神の言葉に従い、異教徒を滅ぼし尽くす「聖戦」となっていった。

申命記 2 章には、次のような記事が載っている。

「我々の神、主が彼を渡されたので、我々はシホンとその子らを含む全軍を打ち破った。我々は町を一つ残らず占領し、町全体、男も女も子どもも滅ぼし尽くして一人も残さず、家畜だけを略奪した。」(申命記 2 章 33 ~ 35 節)

カナン侵略の具体的な戦争の記事がこのように記されている。神は異教徒である異邦人に容赦のない戦いを仕掛ける。侵略は異教の神々に対する神の怒りであるとユダヤ人は理解する。

今日的な人道的正義感の視点から言えば、他民族を殲滅して自国を打ち立てる行為は、そのこと自体「侵略行為」、「残虐行為」として非難されるものである。だが、ユダヤ民族にとっては神の約束の地への進行であり、異教の神々を滅ぼし尽くして、真実の神の支配を実現させる「聖戦」であった。そこには他民族への憐れみや融合、また寛容さは見られない。異教徒との対決が大義

名分となっている。(注 11)

旧約聖書学者のトンプソンは、このような「聖戦」による侵略について、次の問いを発している。「イスラエルに対するこの初期の命令(他民族の殲滅)は、現代のクリスチャンが正義のために戦争に行くことを許可していると受け取ることができるかと、問うことができよう。神の民は悪を打ち負かしキリストの大義を推進する戦いに従事すべきであるという原則が残っていることには疑いの余地はない。しかし、特定の戦争に関しては、クリスチャンの間に広範な意見の相違があり、現在の状況での指標がこのような箇所から得られると全ての人が思っているわけではない。・・・カナン時代に、神はご自身の民に敵と戦うことを命じた。けれども新約聖書のより十分な光のもとでは、命令しない」と。

「裁きの神」の姿がカナン侵略の時代には強く見られる。そこには、異邦人・異教徒への憐れみは見られない。(注 12)

だが、「裁きの神」の怒りは異教徒に対してだけではない。選びの民の中の「不信仰な者」に対する裁きも凄まじい。

モーセは、出エジプトにおける神の民の指導者であり、神の言葉を受けて約束の地に至る民族移動の推進者であったが、選びの民の不信仰によって約束の地を目前にしてその生涯を閉じることになる。荒野を彷徨う中で、神を信ぜず、こともあろうにカナンの農耕神である「バアル」を拝み、そのために金の子牛を作ったことにより、民族を指導しなかった罪として約束の地に到達することを自身の目で見ることができなかった。

ソロモン王の治世の後、北イスラエル王国と南ユダ王国に分裂した神の民の歴史の中で、イスラエル王アハブはヤハウエを捨て、妃イゼベルの故郷の神である「バアル」の神殿を建て、アシュラ像を造って国民に礼拝させた。列王記上 4 章には、「アハブは彼以前のだれよりも主の目に悪とされることを行った」と記されている。預言者エリヤは、他の神を選んだアハブ王に対する神の裁きの言葉を王に告げ、自身の命が何度も脅かされることがあった。エリヤはバアルの預言者たちとの戦い、イゼベルの企みにも屈しなかった。神は怒りを持って不信仰なアハブ王と王妃イゼベルを裁いた。

異邦人であろうと神の民であろうと、唯一神ヤハウエへの信仰のない者を神は裁く。この裁きの神は、やがて新約聖書の時代になって、「愛の神」の側面を帯びるようになる。

## (2) 知られざる神に(使徒言行録 19 章 28 ～ 40 節)

使徒言行録 17 章にはアテネの神との戦いについて記されている。使徒パウロがアテネの神殿に「知られざる神」と言う祭壇があるのを見つけ、この異教の神と唯一神ヤハウエとの対決を試みる記事である。

パウロはアレオパゴスの評議所の真ん中に立ち、福音を語る。この評議所はかつてソクラテスが様々な哲学者と論じ合った場所である。パウロの説教の聴衆者は、エピクロス派やストア派等の哲

学者であった。彼らはキリストの福音を理解しない。

パウロが取り上げたのは、町のいたる所に見られる「知られざる神」の像である。アテネには当時三千もの宗教施設があり、それぞれの神の像が建てられていた。その中に「知られざる神」の像があった。ギリシャの宗教は神話から発したものであり、無数の神々が信仰の対象となっていた。知らずに拝んでいる神とは何かを通して、本当の神とは何かをパウロは語る。この場面は、キリスト教と異教との対決である。

「知られざる神々」にまで畏敬を持って礼拝することは、アテネの人々の宗教心の旺盛さを示すものである。パウロは一神教の信仰について語る。パウロは旧約聖書に示されるヤハウェの神について、すなわち神は人間の手で作られたものではなく、歴史の創造者、歴史に働く神について語る。人間の力で作った石の像とは異なること、偶像礼拝の無知を指摘する。次いで、神がその一人子を選び、彼によってこの世を裁くことに触れ、彼は死者の中から復活したと証言する。

死者の復活を聞いたアテネの哲学者たちは一様にあざ笑い、その場を立ち去った。しかし、その説教を信じた人々がいたことも聖書は記している。

アテネ人は自らをゼウス神の子孫として考える誇り高い人々であった。パウロは自身をあらゆる点で最も誇り高いユダヤ人であることを自認していた。しかし、キリストとの出会いの中で、誇り高いユダヤ人であることを捨て、異邦人伝道へと歩み出した使徒である。キリストの故にユダヤ人であることを塵のように捨てたパウロは、神の子孫であるアテネ人に対して、信仰とは「誇り」ではなく、真実の神の前で悔い改めることであると示す。

他宗教との対決で示したパウロは、その根底に生きておられ、人間に働きかける唯一の神の前で、謙ることの大切さを説く。アテネの哲学者たちの人間的な思惟は、復活のキリスト、神の前での謙りは通用しない。ここには哲学と宗教の相違も見て取ることができる。

パウロの他宗教との対決では、神とは何か、神の前での人間とは何かを繰り返し語ることに終始している。武力を背景とする人の力で他の神々を制圧するのではなく、説教による悔い改めを求めることが、他の宗教との戦いの中心に置かれている。

#### 4. まとめ

##### (1) 信仰義認と自己義認

ルカ神学における「異邦人理解」を探ってきたが、異邦人、すなわち他国民であり他神教徒との共生の可能性を拓いた者として、ルカを理解することができる。

だが、ここで問われるのは、ユダヤ教における「選民思想」とその中核にある「律法による自己義認」との決別である。異邦人排斥の要因である「選民思想」は、異邦人との融和を不可能にし、民族の孤立を招いてきた。その「選民思想」を支えた内実こそが、律法による「自己義認」であった。神の与えた律法を厳格に遵守することが、神の民に相応しいとされた。どれだけ律法に忠実であるかが問われた社会である。聖書に登場するアンチキリストのファリサイ派とは、律法遵守至

上主義者であり、社会の尊敬を集める人々であったが、律法を守ることでできない弱者(病人、障害者、徴税人、貧困者)を蔑む人たちであった。ファリサイ派とは、一般大衆と「分離した者」を表す言葉である。文字通り、彼らはユダヤ教徒のエリートとして君臨していた。

だが、イエスは彼らの「自己義認」に激しく対立した。人が神から義(正しき者)とされるのは、神の一方的な憐れみによるものであり、人間の行い、すなわち功績によってではないことを示した。ファリサイ派がイエスを十字架にかけるとほど憎んだのは、人間の行いによって正しい者になれると信じた彼らの信仰の故であった。

イエスは、人間の行いが神の裁きのすべてであるとするなら、誰が一体救われるのかと問う。人間の弱さの故に、神の憐れみを乞うたのである。この信仰による義認からは、「選民思想」は生じない。イエスの教えは、律法による自己義認を否定し、神の憐れみによる義認を立てたことである。ここに「選民思想」との決別が見られる。ユダヤ人の救いから、異邦人の救い、すべての国民の救いが描かれている。

この自己義認論と神の憐れみによる義認論の違いを、森本あんりは、「反知性主義」の中で語っている。

森本は、「反知性主義とは実証性や客観性を軽んじ、自分が理解したいように世界を理解する態度」としている。この反知性主義はアメリカで顕著に見られる傾向にあり、宗教的な平等理念と経済的な実用主義との奇妙な結びつきである。「アメリカ的な宗教的特色として、宗教と現世的利益との結びつきは、信仰がこの世の成功をもたらすという考え方である。かつて中世の聖職者は、来世のことしか語らなかったのに、アメリカの説教者は信仰が現世でどのような益をもたらすかを語る。アメリカのキリスト教は来世ではなく、現世での利益を徹底して求める。それが反知性主義の正体である」と。(注 13)

アメリカのキリスト教は、本来のキリスト教から大きくかけ離れている。自分たちの繁栄は神の義認の証左であり、神によって選ばれた国家であると自認している。自らの正しさに対して、神はその繁栄を与えているという不可思議な自己義認論が、国家の中枢に蔓延している。他国を自らの価値観で裁き、侵略し、世界中にその絶大な支配力を駆使できるのは、その根底にある自己義認論である。

アメリカは断じてキリスト教国ではない。

## (2) 異邦人とは誰か

ルカ神学を通して、「異邦人」とは誰か、という問いに直面する。かつてユダヤ教徒であれば、異邦人、すなわち他国民、他神教徒として、排斥・差別される者であった。彼らは神による選ばれし者でもなく、神の庇護にある者でもない。討ち滅ぼされて然るべき民族として捉えられていた。

だが、ルカ神学に登場する異邦人は、救いの対象者である。むしろ、自己義認論を身につけたユダヤ人よりも、神による義を受け入れる素地のある者として登場する。彼らには「選民思想」は

ない。ユダヤ人社会にあつては、異邦人は社会的弱者であり、人々から軽蔑の目で見られる者であつた。差別され排除された人々の代表として、聖書に登場する。

イエスご自身が、ガリラヤ生まれのナザレ人であつたことは、異邦人に近い者であり、差別される者として自身を認識していたのである。イエスにとって、異邦人はユダヤ人社会一般が持っている差別感から解放されていたと考えられる。

異邦人とは誰か。異邦人とは差別され、排除される者の代表を示す者である。そして、イエス自身が、自らを異邦人の一人として身を以て示している。

このようにして、異邦人差別や排除を乗り越えてキリスト教は世界宗教になっていった。

だが、今日の世界情勢やキリスト教会の現状を見ると、イエスの教えは曲解され、支配者や強者の理論の中に埋没している。

もう一度、本来のイエスの教えに立ち戻るとき、人種・民族・文化の違いを乗り越えて、人間社会の共生性が確かなものとして知られるようになるだろう。

「造り主の姿に倣う新しい人を身につけ、日々新たにされて、真の知識に達するのです。そこには、もはや、ギリシャ人とユダヤ人、割礼を受けた者と受けていない者、未開人、スキタイ人、奴隸、自由な身分の者の区別はありません。キリストがすべてであり、すべてのもののうちにおられるのです。」(コロサイ書 3 章 10～11 節)

### <異邦人の今日的考察>

私が伝道師を務める日本基督教団桜本教会は、様々な人々の集う教会である。人種・民族、言語、貧困等の課題を乗り越えて「インクルーシブ教会」として知られる教会である。私たちは、教会で多くの外国人と知り合い、彼らとの共生を試みてきた。民族や言語の違いはあつても、お互いが神の前に一つにされたものとして、教会生活を続けている。その具体的な事例をいくつか上げる。

#### ①ナイジェリア人

ナイジェリア人のKさんが教会を訪ねてきたのは、二月の寒い晩のことである。何か食べ物を欲しいと凍えながら訴えた。彼の英語はあまりよく聞き取れない。だが、困っている状況は見て取れた。教会に上げて食事を温めて出したところ、あっという間に食べ終わってお代わりを求めた。何日も食事をしていないという。

食事の後に、彼の事情を聞いた。ナイジェリアから日本に働きに出てきたが、仕事が見つからなく、やむなくホームレスになっている。この教会がホームレスの支援をしていると別の教会で聞いたので尋ねてきた。助けて欲しい。

ナイジェリアの宗主国はイギリスであり、彼はイギリス国教の信者である。日本では「聖公会」の教会である。東京の大きな聖公会の教会をいくつか訪ねたが、仕事の紹介はおろか、礼拝に出る

ことも拒まれた。同じ宗教を信じる仲間として迎え入れられることはなかった。このままでは日本でホームレスとして生きるしか道がない。

私たちは、彼をどのように遇するかを考えた。私たちの教会は、長く川崎のホームレスの支援を行っている。週二回の食事や生活用品の提供、住居や健康、就職に関する相談も支援の内容としている。だが、宿泊所を持っているわけではない。痩せて行く当てもなく、日本語が話せるわけでもなく、支援者もいない。私たちは緊急のこととして、彼を牧師館に当分住まわせることにした。台風などの災害等の緊急時の宿泊場所として会堂を提供したことはあるが、弱ったKさんを牧師館で同居することにした。杞憂することがなかったわけではない。当時の私は県の教育委員会に勤務していて、帰宅は遅い。その間、牧師をしている妻が彼の相手をするようになる。ほとんど見ず知らずのKさんを家族として遇することに不安がなかったわけではない。だが、私たちは助けを求めて教会に飛び込んできた人を拒むことはできなかった。そのまま彼との共同生活は2週間に及んだ。

私たちは彼の居住地や仕事探しに奔走した。教会の信者である在日朝鮮人の知り合いのアパートを借りることができた。住民票のない外国人を受け入れることに不安のある大家さんを説得して、何かあれば教会が責任を持つことを約束して借りることができた。

仕事は彼のできることを考えて、英会話の個人レッスンを当面の仕事にした。教会の信者7、8人が彼の生徒になった。もちろん私も妻も。彼の英語は訛りがあって聞き取りにくく、さらに文法能力は私たちの方が上であったが、何とか彼を養っていくことを考えた。

礼拝に参加したので、信者との交わりもできていった。そんな生活を半年も続けたが、知り合いのナイジェリア人と一緒に仕事をする事になり、東京へ転居することになった。転居してもしばらくは私たちの教会に通っていたが、そのうちに教会に来ることはなくなった。何年か経って訪ねてきた。背広姿で見違えたが、現在は自動車部品を買い取って母国に輸出する仕事に就いているとのことであった。彼はどんで私たちの教会に拾われて今があることを語り、深い感謝の念を表した。彼からの連絡が途絶えて十年ほどになるが、民族・言語・肌の色を越えて、同じ信仰を生きる者としての交わりが確かにそこにはあった。

「善きサマリア人のたとえ」で、強盗に襲われて傷ついて道に倒れていた人を運んだ先の宿屋とは、教会であると私は解釈するが、その原点となる出来事である。

## ②ウガンダ人

ウガンダのSさんとの出会いは、彼が農業研修生として日本に来たときに始まる。クリスチャンである彼を教会に招いて一緒に礼拝し、交わりの時を持った。彼の話は驚くべきものであった。当時はウガンダがアフリカのどこにあり、そこでどのような生活をしているか、私たちは全く知らなかったからである。ウガンダは内戦とエイズの蔓延によって、多くの人々が苦しい状況にあり、Sさんは二百人の戦争孤児たちのために施設を作り、共同生活をしているとのことを聞いた。

その話を聞いて、教会で何かできないかを検討した。その結果、教会学校の献金をまとめてSさんの施設に送ることに決めた。今まではユニセフの募金に献金していたが、苦しんでいる子どもたちのためにと、明確な目標ができた。金額は年間20万円ほどであり、日本ではわずかな金額であったが、それは学校の改修工事、農場整備、子どもたちの医療費の三等分にされて活用されたことの報告があった。貧しい国の内情と、同時に日本が恵まれていることを改めて知らされた。

ウガンダの子どもたちから桜本教会に集う子どもたちに手紙が届くようになった。そこから日本とウガンダの子どもたちの文通が始まった。向こうの方が圧倒的に人数が多いため、一人の子どもに何通もの手紙が届いた。

文通によって子どもたちの交流が始まった。二ヶ月に一通のペースで手紙が届き、その返事を教会学校の子どもたちが書いて送った。

その中の10才の少女同士の文通は、毎回私たちの慰めとなった。ウガンダの施設での生活や自然や気候などが書かれると、それに対して日本での生活や自然や草花についての文章のやりとりがあった。特に、相手の少女が内戦で両親を失った失意の中で、文通によって元気になってきたとのSさんのコメントがあり、それが一層相手を思いやることになっていった。だが、その文通は突然打ち切られることになる。少女がエイズに感染していて、その病気のために亡くなったのだ。日本人の少女の落胆は大きく、私たちも慰めの言葉を失った。だが、彼女は立ち直った。そして、いつか二人で見るはずだったビクトリア湖の夕陽を見に行くと私たちに告げた。

私たちの教会学校では、現在も貧しい外国の子どもたちのために献金を送っている。恵まれた日本の子どもたちが、貧しい外国の子どもたちのために、お小遣いを貯めて献金して送る。与えられる者から与える者になることの大切さを学んでいる。日本では貧しい外国の人々を支える心が育たない。それは、貧しさを知らないからである。私たちは、豊かな者の上にも、貧しい者の上にも、等しく恵みを与えてくださる神がいることを信じ、また神の民として民族・人種を越えて一つになれたことに感謝しつつ、ウガンダの少女のことを深く思う。(注14)

### ③ブラジル人

ブラジル人のYさんが、小学生の子どもを連れて教会の礼拝に出席したのは、暖かく感じられるようになった3月のことである。母親のYさんは、ほとんど日本語が分からなかった。小学5年生の子どもが通訳者であった。今まで日本にあるブラジル人の教会に行っていたが、あまりに遠いために近くの教会にしたいとのことであった。Yさんは私たちの教会にすぐに馴染んだ。ホームレスや障害者、そして外国人のいる教会はみんなで助け合う教会だったからである。特に、障害者やホームレスの人たちには親近感を覚え、彼らとすぐに打ち解けることができた。

だが、この親子には問題があった。母親が重い精神障害であり、子どもは小学校でいじめに遭っていた。いじめについて聞き出して、その対応を求めて私は小学校の校長に会った。外国籍であり、学力が低く、体格も小柄なために、周囲から馬鹿にされているということであった。私は彼

から聞きたいじめの実態を校長に伝え、指導の経緯を定期的に報告して欲しいと依頼した。校長は約束し、その後いじめはなくなった。だが、6年生の夏休み以降にまた、いじめが起こった。6年生の2学期には中学進学に向けた指導が行われる。彼は学区の中学校に行けばいじめが繰り返されると心配した。私は意を決して、学区を変えることを提案し、小学校長と別の学区の中学校長に提案した。中学校の校長は旧知の間柄であり、二つ返事で引き受けてくれた。また、低学力であることも伝えると、特別な指導体制(個別の補習のシステム)で指導に当たると約束してくれた。

母親のYさんは重い精神障害があり、家に引きこもって時々教会に出てくるが、親子の生活の支援を教会員が交代で行っている。教会には医者も社会福祉士も学校教員もおり、どのように支えるのかをチームで検討している。

Yさんは日本人とブラジルで結婚し、夫の故郷の長野県で暮らすようになったが、夫の病死の後、長野県では暮らせないと川崎に出てきた。日本語を話すことも聞いて理解することもほとんどできないのは、夫亡き後、異郷で暮らすことの困難さがあったからだろう。また、精神障害という問題もあったこともその要因だろう。

彼女は私たちの教会を本当の家族のようだと思っている様子が見える。礼拝に来るときはたかさんのケーキを作って持ってくる。知的障害の女性とは本当の友だちになっている。お互いが言葉に不自由でも、表情で心の結びつきを理解している。礼拝ではいつも隣の席について、何やら二人だけで分かる言葉のやりとりをしている。

ルツは、義理の母親の故郷に付き添って生まれ故郷を離れたが、そこで安住の地を得た。住む国は、故郷ではなく異郷であろうとも、心通わす仲間のいる世界が本当の故郷なのだ。Yさん親子との交わりの中に、本当の故郷とは、本当の家族とは何かを考えさせられる。私の妻は教会の牧師であるが、彼女を母親のように慕っている。教会とは神の家族なのだ。

#### ④在日コリアン

一人の在日コリアンが洗礼を志願した。Hさんはホームレスの支援団体に所属していて、私たちの教会の支援活動と一緒に行動するようになり、やがて礼拝に参加するようになった。教会には多くのホームレスの人々や外国人がいて、次第に教会員とも親しくなり、一年ほど経って洗礼を受けたいと申し出た。

教会では毎年のようにホームレスの中から、受洗志願者が現れて、加わっていく。教会を単に生活支援を受ける場所としてだけでなく、自分の居場所として自覚していくからである。交わりの中で仲間として生きたいと思うようになるからである。25年間の支援活動の中から、37人の洗礼者が現れている。

Hさんの洗礼志願に、教会員は喜んで承認した。ところが問題が起こった。洗礼を受けるに当たって、本名で受けるかという点が問題となった。Hさんは通名を名乗っていた。彼が在日コリアンであることは、教会の一部の者しか知らない。

彼は、信者だけの礼拝であるなら本名を名乗って受ける。だが、多くのホームレスの人たちが出席する礼拝では、本名は名乗れない。あいつは朝鮮人だと、今度は自分がいじめの対象になる。ホームレスの世界でも、障害や病気、また高齢や体力のない者は、いじめの対象になり、まともに相手にされない。まして、朝鮮人と分かたら生きている限り馬鹿にされることになる。本名では受けたくない。

日本社会には多くの在日コリアンが暮らしている。日本の植民地政策の中で、強制連行などによって朝鮮半島から渡ってきて、戦後も日本に残った人々である。私は在日コリアンの多住地区である桜本地区の教会の伝道師をしていて、また、教師として勤めた中学校も桜本の近隣地区にあり、多くの朝鮮人との関わりがあった。彼らが本名でなく、通名で生きているには理由がある。皇民化政策によって創氏改名を余儀なくされ、通名で日本社会を生きてきた彼らには、本名を名乗って生きるだけの寛容さが日本社会にはなかったからである。戦後20年も経って、ようやく本名で生きる取組が開始されたが、それでも差別と偏見に満ちた日本の社会で、朝鮮人を名乗って生きることの難しさがあった。

Hさんは、長く日雇いの仕事をしてきて、やがてホームレスの支援活動に取り組むことになるが、自分が在日コリアンであることを自らカミングアウトしたことはない。教会の礼拝に出席し、神の前で生きることを決意した時も、聴衆の前で朝鮮人であることを隠そうとした。彼の心境は痛いほど理解できる。

だが、私たちの教会には本名で生きる在日コリアンが多くいた。彼らが説得をした。洗礼とは神の前で生まれ変わることだ。神の前に真実に生きることを決意することは、自らの出自を明白にすべきであると。彼らは本名で生きることが、自らのアイデンティティを取り戻すことであると、生涯を賭けて戦ってきた人々である。彼らの説得にHさんは得心した。ホームレスの人々の前で、堂々と朝鮮名で彼は洗礼を受けた。その時まで、朝鮮人として差別の中を生きてきた彼の苦悩の深さを思い知らされた私たちは、洗礼を心から喜ぶと同時に、その決断をした彼の心中を思って、涙しない者はなかった。(注15)

その後、一時教会から離れたことがあったが、現在は高齢者施設に入所しながらも、教会との交わりを継続している。

世の中から差別や排除を受けるホームレスの人々、その彼らからさらに差別やいじめを受ける在日コリアン。人権の世紀と言われる今日、未だに苦悩の淵に人々を追いやる日本人社会。教会は、民族、人種を越えて、共生社会を作るための努力を惜しんではならない。教会こそが、民族や人種の違いを乗り越えて、真にインクルーシブな社会の原点とならなければならない。キリストが示した道、インクルーシブな共同体としての生き方を、この世に示すために。

〈注〉

- 1) 「聖書 新共同訳」日本聖書協会 2007 p.8  
以下、引用聖書は同書を用いている。
- 2) 「ルカ福音書の神学」J. グリーン著 新教出版社 2012 p.150
- 3) 「教会史概論」W. レーベニヒ著 日本基督教団出版 1969 p.31
- 4) 「ユダヤ人の歴史」I. ハレヴィ著 三一書房 1990 p.63
- 5) 「わが半生」R. レイン著 岩波書店 1986 p.238
- 6) 「ホロコースト以後を生きる」宮田光雄著 岩波書店 2009 p.15
- 7) 「イエスの現場」滝澤武人著 世界思想社 2006 p.187
- 8) 「NTD 新約聖書注解 ルカによる福音書」R. カルペバー著 1976 p.298
- 9) 「ルカによる福音書」F. クラドック著 日本基督教団出版 1969 p.337
- 10) 「説教者のための聖書講解 使徒行伝」高森昭著 日本基督教団出版 1990 p.93
- 11) 「契約の民 その法と歴史」M. ノート著 日本基督教団出版 1990 p.36
- 12) 「テインデル聖書注解 申命記」J. トンプソン著 いのちのことば社 2010 p.111
- 13) 「反知性主義」森本あんり著 新潮社 2015 p.218
- 14) 「ウガンダに咲く花」鈴木文治著 コイノニア社 2009 p.99
- 15) 「ホームレス障害者」鈴木文治著 日本評論社 2012 p.178